

Q 3 保健室等登校の期間が半年以上になっていますが、なかなか教室で他の児童生徒と一緒に学習することができません。どのような対応をすればいいでしょうか。

### 現 状



1 実態調査結果からも、保健室等登校が半年以上の児童生徒は、保健室等登校児童生徒の約37%、中でも1年以上の児童生徒は約26%近くになることが示されている。

保健室等登校を継続している児童生徒の中には、自宅から学校までの距離よりも、保健室等から教室までの心理的距離が遠いと感じている場合もある。

2 学校行事や特定教科などに参加しながら、徐々に教室になじんでいこうとしている児童生徒がいる反面、教育活動に全く参加しない児童生徒も30%程度いる。

3 不登校期間や保健室等登校の期間が長期化することで、対人的な不安以外に授業についていけないなど、学習に対する不安が高まっていることも事実である。

### 考えられる対応例

1 保健室等登校の児童生徒への対応計画を作成する中で、学習支援をどのようにするかを明確に示すことが重要である。学習内容が理解できないことは、教室での活動がほとんど学習活動であるために、最も苦痛を強いることにつながる。当該学年にこだわらず、理解が不十分な段階まで具体的に診断し、個別学習を進めることが大切である。

2 本人の得意とする学習を中心に、担任（教科担任）の協力を得ながら、できる喜びを体得できるような学習プリントを準備し、学習することの楽しさを体感させることが大切である。

3 本人と気の合う友達が保健室等へ遊びに行くように促し、保健室等で養護教諭等の助言の下、楽しく遊ぶことも対人関係の不安を取り除くために必要なプロセスである。その際、養護教諭等がリーダーとなり、構成的グループエンカウンターを活用し、意図的なかわりを促すことも効果的である。

構成的グループエンカウンター  
エクササイズ参考例（共同絵画）  
グループのメンバーが、交互に無言で一つの絵を完成させる。絵には、人、山、川、木を入れたり、各人が2、3回は描けたりするように配慮することで、非言語的コミュニケーションの重要性に気付く。

4 友達が、一緒に保健室等で給食を食べることも効果があることが多い。給食を食べることで、午前中しか学校にすることができなかった児童生徒が、午後まで学校で過ごすチャンスが増え、学校生活に自信をもつようになることも多い。ただ、意図的な働き掛けには、マイナス効果が出ることもあるため、本人の状況を常に確認しながら進めることが大切である。